

Title	希望喚体の文法
Author(s)	堀川, 智也
Citation	大阪外国語大学論集. 18 p.89-p.101
Issue Date	1998-03-30
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79749">https://hdl.handle.net/11094/79749</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 希望喚体の文法

堀 川 智 也

### On optative expressions in old Japanese

Horikawa Tomoya

In this paper, I discuss a diachronic change of old Japanese which express “wish”. In old Japanese there are particles “moga” and “shika”, which demonstrate “wish”. Prototypically a sentence which has one of such particles expresses one’s wish for a certain object in Nara era. But the sentence also can be used as an expression which demonstrates one’s wish that something should be a certain condition. The second use has strong lexical constraint.

#### § 0 は じ め に

山田孝雄の文法論における重要な概念として、述体と喚体の区別がある。主位観念と賓位観念が統覚作用によって結合することによって句が成立するのが述体の句であるが、これとは全く異なったあり方で成立する句が存在するとして、喚体の句を別立てしたことの意義は大きい。即ち、述語によって「述べる」という形をとって意味のある内容を表現するのが述体だとすれば、「述べる」という形をとっていないにもかかわらず、れっきとした一つの思想を表現することができる形式として喚体の句の存在を指摘した点が重要である。述体の句と喚体の句の区別について、山田(1936)は次のように述べている。

——喚体の句は常に一の体言を骨子としてそれを呼格としそれを思想の中心点として構成せらるるものなり。これはその直感的一元性の発表にして感情的の形の発表形式をとることに於いて述体の句の理性的二元的の発表なるものと性質と構造の二面に於いて根本的に違うものとして対立するものなり。——

述体の句が、主位観念・賓位観念の対立を理性的に統一する二元的な発表形式であるのに対し、喚体の句は主格、賓格の区別のない一元的な発表形式で、体言呼格に対して呼び掛けるという形をとる。このように、ものの名前をただ「呼ぶ」あるいは「わめく（喚く）」だけで言語表現としてまともな意味をなすのが感動表現または希望表現であり、これがそれぞれ、感動喚体・希望

喚体に対応している。しかし、主述二項に分節されず体言一体的に語られるのが喚体の句であると言う原則は、感動喚体にも厳しく当てはまる。本稿は希望喚体について論じるものであるが、それに先立って、感動喚体の例を見ておこう。

- ・天の原降りさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも（古今406）
- ・白雲のこなたかなたに立ち別れ心をぬさとくたく旅かな（古今379）
- ・秋風にたなびく雲の絶え間より漏れ出づる月の影のさやけさ（新古今413）

以上挙げた例のように、山田は体言一体的に語られるものだけを感動喚体とし、表現効果としては喚体に近いものの述語が存在し文末連体形をもつものは擬喚述法として別扱いしている。擬喚述法については山田(1908)は次のように述べている。

―― この述法は述語は存在してあるは中止述法に同じけれど、かれは陳述を不十分にして余情を含ましむるに、是は述語を以て体言的に結体すべき勢を取りて、喚体句の如く見えしむるを異なりとす。かくするは連体形を以てするなり。

かかる述法に立てるものはその余韻によりて述体ながらも喚体の性質を帯びたるものなり。――（中略）――その意多くは、感嘆若くは切によりかくるが如き意を寓したるものなり。――

擬喚述法の具体的な例を挙げておこう。

- ・みよしのの山の白雪ふみわけて入りにしひとのおとづれもせぬ（古今584）
- ・あひにあひて物思ふ頃のわが袖に宿る月さへ濡るる顔なる（古今756）
- ・逢坂の関をや春もこえつらむ音羽の山のけさはかすめる（後拾遺4）
- ・いつしかと待ちしかひなく秋風にそよとばかりも萩のおとせぬ（後拾遺950）
- ・八重菊にはちすの露をおきそへてここのしなまでうつろはしつる（後拾遺1187）

このように感動喚体においては体言一体性と言うことをかなり厳しく押し出したのに対し、希望喚体についてはこの条件はかなりゆるくなっている。山田自身は希望喚体の構成上の必要条件として、「中心たる体言＋希望終助詞」という条件を挙げているが、厳密な意味でこの条件を満たしている希望喚体はごく少数で次に挙げるようなものに限られる。

- ・我がごとく我を思はむ人もがなさてもやうきと世を心見む（古今750）
- ・音羽の滝の音に聞く老いず死なずの薬もが（古今1003）

山田が希望喚体として挙げている残りの例は、厳密な意味では体言一体的とはいいがたい例ばか

りである。例えば、次に挙げるのは、純粋な体言ではなく、形容詞連用形の体言化用法の場合である。

- ・世の中にさらぬ別れの無くもがな千代もといのる人の子のため（伊勢84段）
- ・君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな（後拾遺669）

これらの例は連用形体言化という意味でかろうじて希望喚体の条件を満たしているとも言えるが、次に挙げる例では、希望の終助詞が中心たる体言に直接ついておらず、条件を満たしているとは全く言えないものである。

- ・河の上のゆついはむらに苔むさず常にもがもなとこをとめて（万葉集22）
- ・み空行く雲にもがも高飛ぶ鳥にもがも（万葉集534）
- ・春さらば散らまく惜しき梅の花しばしは咲かずふふみてもがな（万葉集1781）
- ・龍の馬も今も得てしかあをによし奈良の都に行きて来む為（万葉集806）
- ・なかなかに人とあらずは酒壺になりにてしかも酒に染みなむ（万葉集343）
- ・まそ鏡見しかと思ふ妹も逢はぬかも玉の緒の絶えたる恋の繁きこのころ（万葉集2366）

これらの例は形の上では「中心たる体言＋希望終助詞」という条件を全く満たしていない。にもかかわらず、本稿では、これらの大部分は本質的な意味では喚体の条件を満たしていると考えた。どのように解釈することによってそのように考えることができるのか、どのような意味で、希望喚体のプロトタイプからの拡張と言えるのかを論じるのが、本稿の目的である。

## § 1 モ ガ

### 1-1 「モノ」の希求

#### ①体言＋モガ

ものの名前をただ「呼ぶ」あるいは「喚く（わめく）」だけで、意味をもった言語表現になるのが希望喚体の原則だと言うことからすれば、体言に直接、希望終助詞が接続する形で「モノ」の希求を表わすのが最も典型的な希望喚体だと言える。この形式は山田自身があげている希望喚体の構成上の必要条件にぴったり当てはまるものである。このタイプは奈良時代から広く見られる。

- ・かくのみや恋ひつつあらむさ丹塗りの小舟もがも 玉まきの真かいもがも（万葉集1520）
- ・足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継ぎ橋止まず通はむ（万葉集3387）
- ・虎に乗り古屋を越えて青淵に蚊竜捕り来む剣大刀もが（万葉集3833）

- ・花の木にあらざらめどもさきにけりふりにしこの身なる時もがな（古今445）
- ・我がごとく我を思はむ人もがなさてもやうきと世を心見む（古今750）
- ・音羽の滝の音に聞く老いず死なずの薬もが（古今1003）
- ・あふまでの命もがなと思ひしは悔しかりけるわが心かな（新古今1155）

現実には存在しない「もの」を心の中で思い浮かべ、その名前を「呼ぶ」という形で心に浮かんだまを一体的に表現する形式である。非現実の対象の存在を指定することで述語を用いずに希求を表わすことができる。通常の述体とは異質なあり方で希求表現ができることに特徴がある。これはあくまで「モノ」の希求でありこれが希望喚体としての希求表現のプロトタイプである。

## 1-2 ある状態での存在の希求

### ②形容詞＋モガ

1-2の諸例は、「非現実の対象の存在」のあり方・様態を様々に指定する、そういうヴァリエーションと考える。

形容詞文については川端(1958)の了解に従い、常に存在を内に含んだ表現と考える。即ち、「雪白し」は「雪、白くあり」というふうに、存在詞「あり」を内に含み「白く」という情態修飾によって、その存在のあり方に指定が加えられた表現だと考える。そのように考えれば、次の例は、情態修飾成分を含んだ存在の希求表現と考えることができる。

- ・大君にかたく仕へ奉らむと我が命も長くもがなと言ひしたくみはや（紀歌謡78）
- ・天橋も長くもがな 高山も高くもがな（万葉集3245）
- ・命をし ま幸くもがも名欲山 岩ふみならしまたまたも来む（万葉集1779）
- ・君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな（後拾遺669）

これらはすべて基本的には「存在」の希求であり、その存在の一つのあり方、様態として、「命が『長い』というあり方で存在すること」「山が『高い』というあり方で存在すること」の希求だと考えられる。しかしながら、先に見た1-1の用法が、「薬もが」のように純粋にモノの希求であったのに対し、ここでは「モノがどうである」ことの希求、即ちコトの希求への第一歩、言いかえれば、喚体から述体の方に広がっていく萌芽が見られると言えるだろう。言語表現として、ただもの名前を呼ぶだけの喚体表現の不安定さは常に述体的に述べる表現へと広がって行きやすいその萌芽なのである。

次の例は「無し」という非存在を表わす特殊な形容詞で「対象の非存在」を希求する例である。

- ・石ばしる滝無くもがなさくら花たをりても来む見ぬ人のため（古今54）

- ・世の中にさらぬ別れの無くもがな千代もといのる人の子のため (伊勢84段)

### ③副詞的成分＋モガ

- ・河の上のゆついはむらに苔むさず常にもがなとこをとめて (万葉集22)
- ・水沫なすもろき命も拷縄の千尋にもがもと願ひ暮らしつ (万葉集902)
- ・倭文たまき数にもあらぬ身にはあれど千年にもがなと思ふゆるかも (万葉集903)
- ・長門なる沖つ借島奥まへて吾が思ふ君は千歳にもがも (万葉集1024)
- ・秋山の色なつかしきももしきの大宮人は天地日月とともに万代にもが (万葉集3234)
- ・山吹の花の盛りにかくのごと君を見まくは千年にもがも (万葉集4304)

この類に現われるのは副詞的成分といっても語彙的制約が強くあり、「常に」を代表として、それと基本的に同工異曲の「千歳に」「千年に」「万代に」「千尋に」などである。これらは、副詞的成分に直接モガがついており副詞が修飾すべき動詞は現れていないが、すべて存在のあり方を修飾する情態修飾、即ち「あり」を補って解釈できるものである。即ち、「常にもがな」は「常にあり」という希求、常に存在することの希求であり、広義の存在希求表現と考えられる。次の例も、「常葉」は名詞であるが、実質的には副詞的成分と見なすことが可能で、同類と見なすことができる。

- ・しらとほふ小新田やまの守る山の末枯れせな常葉にもがも (万葉集3436)

次に挙げる例は、「かく」という副詞的成分にモガがついた例 (シは強めの意) であるが、やはり「あり」を補って解釈できるという点で同様と考えられる。

- ・出で立たす御空をみれば万代に斯くしもがも (紀歌謡102)
- ・わが暁 三重の川原の磯の裏に かくしもがもと鳴くかわずかも (万葉集1735)

### ④純粋な体言＋二十モガ

- ・撫子のその花にもが 朝な朝な手に取り待ちて恋ひむ日無けむ (万葉集408)
- ・み空行く雲にもがも 高飛ぶ鳥にもがも (万葉集534)
- ・天飛ぶや鳥にもがもや 都まで送りまをして飛び帰るもの (万葉集876)
- ・たまきはる命に向かひ恋ひむゆは君がみ舟の梶柄にもが (万葉集1455)
- ・み空行く雲にもがもな けふ行きて妹に言問ひあす帰り来む (万葉集3510)
- ・父母も花にもがもや 草枕旅は行くとも捧ごて行かむ (万葉集4325)

「雲にもがも」を例にとって説明しよう。これは私が「雲になる」ことであり、さらにその根本としては「私が雲である」ことの希求である。いわば私が「雲というあり方・様態で存在すること」の希求と解釈できる。即ち、やはり「あり」に対する情態修飾と考えてよい。

#### ⑤動詞＋テ＋モガ

- ・貴人の立つる言立 儲弦 絶えば継がむに 並べてもがも（紀歌謡46）
- ・わがために妹も事なく妹がため我も事なく今見るごとたぐひてもがも（万葉集531）
- ・春さらば散らまく惜しき梅の花しばしは咲かずふふみてもがな（万葉集1871）
- ・佐保川の川波立たず静けくも君にたぐひて明日さへもがも<sup>(1)</sup>（万葉集3010）

これは少し説明を要する。動詞にモガが接続しているという点では一見かなり異質である。②から④の諸例は、「非現実の対象のある様態での存在」を思い浮かべ希求するという説明が成り立ったが、この場合はどうだろうか。動詞が現れているという点では一見述体的な感じがする。しかし、これもコトの実現を述語によって表現するような述体的な希望表現ではなく、あくまでも「モノ」の希求、即ち「非現実の対象である様態での存在」の希求表現だという線で押してみたい。

このように考える根拠として現代語についてはあるが益岡（1984）の議論を参考にしたい。益岡（1984）ではテアル構文のうちA<sub>1</sub>型と分類されるものは「置く」に代表される「配置動詞」であり広義の存在表現の一種であるとしている。

- ・盆栽が並べてある。
- ・飲みかけのコーヒー茶碗が受け皿から離れて置いてある。
- ・リビングテーブルには花が飾ってある。

他には「のせる・掛ける・貼る・敷く・止める」などが挙げられている。「配置動詞」は、ある動作を行なった結果、対象のある場所に配置し存在せしめるという意味を持つが、対象の側から見れば、ある様態で存在するという意味になる。

ここで⑤に該当する動詞は益岡（1984）でテアル構文においてA<sub>1</sub>型になる動詞に限られるのではないかと考えたい。即ち、②から④までと同様に、存在のあり方・様態の指定を受けた非現実の対象の存在を希求するという、これまでの説明を適用することが可能だと考える。具体的に言えば、「並べてもがも」は「儲弦が『並べてある』というあり方で存在する」ことの希求を表わし、要するに「儲弦もが」大差ない意味を表わすことができると解釈する。同様に「ふふみてもがな」は「梅の花が『ふふみである』状態（つぼみを持った状態）で存在する」ことの希求、「たぐひてある」は「私が妹に『たぐひてある』状態（並んでいる状態）で存在する」ことの希

求を表わしていると考えられる。

以上、1－2の②から⑤の諸例は、「存在そのもの」の希求から「存在のあり方」の希求の方に力点が移っていることは否めない。その点ではモノの希求を本旨とする希望喚体の表現性からは逸脱し、述体的な表現に一步踏み出していることは確かである。そのことを認めた上で、ともかくもあるあり方・様態指定を受けた存在の希求という点で、希望喚体のヴァリエーションと考えることが許されるだろう。②から⑤の諸例は、いずれも「あり」に対する情態修飾成分を様々な形で持っている例なのである。

### 1－3 コトの希求に移行したもの

#### ⑥名詞＋ト＋モガ

- ・降り暮し降り暮らしつる雨の音をつれなき人の心ともがな（伊勢 異一）
- ・思い寝の夜な夜な夢にあふことをただかたときのうつつともがな（後撰767）
- ・涙のみ知る身のうさも語るべく嘆く心をまくらともがな（後撰1270）
- ・忘れじの行く末まではかたければけふを限りの命ともがな（新古今1149）

これらは上代には見られないタイプで、すべて「モガナ」の形で使われており、「モガモ」の形では見られない。またすべて「AをBとモガナ」の形で使われ、「AをBとみなす」ことを希求する意味である。これは、1－2が存在の希求をベースにその存在に様態指定がかかったものであったのとは異質である。単純に「AがBである」ことの希求、即ち一致関係の希求から踏み越えて、話者が一種の比喻関係として「AをBとみなす」ことの希求を表わす表現である。これは、「あり」を補って「あり」に対する情態修飾とは解釈できない。即ち、モノの希求からコトの希求に移行している。その点で、山田のいう希望喚体の本質から大きくはずれたものと言わざるを得ない。よって、1－2と1－3の間には大きな一線が画されるべきだと考え、1－3は喚体とは見なさないことにする。

#### ⑦ズ＋モガ

- ・今はとて忘る草の種をだに人の心にまかせずもがな（伊勢21段）
- ・ありはてぬ命待つ間のほどばかり憂きこと繁く思はずもがな（古今965）
- ・わくらばに天の川波よるながら明るく空にはまかせずもがな（新古今325）

これらも⑧と同様、上代には見られないタイプで、すべて「モガナ」の形で使われており、「モガモ」の形では見当たらない。ある否定的状態を思い浮かべ、その状態の実現を希求するという意味である。



形の上の解釈としては、連用形「ズ」の体言化用法によって体言相当の資格を得て、それに「モガナ」がついている形である。形の上では「体言＋希望終助詞」になるが、意味的には、非現実の事態を希求する意味であり、「モノ」の希求とは決して言えない。よって、喚体とは認めないことにする。

「モガ」は上代においてはモノの希求を表わすという一線を守っていたが、平安期に入ると⑥⑦のように、明らかにコトの希求を表わす例が出て来る。これらは「モガ」を使ってはいるが、「コト」の希求を表わすという点では、喚体とはいいがたい。これは、本来の意味で、ものの名前を呼ぶだけで希求を表わすという喚体としての表現性を離れ、「モガ」がそれ自体で希求を表わすマークになったという意味で、用法が変質していると言えるだろう。

## § 2 シ カ

シカは動詞にしか接続しないから<sup>(2)</sup>、そもそも山田の挙げた希望喚体の条件である「中心たる体言＋希望終助詞」というのにあわない。しかし本稿ではこの形式も実は「非現実の対象の存在」を思い浮かべることで、「モノ」の希求を表現するという点では、モガの1－1、1－2の用法と変わるところがなく、述語によって述体的に希望を表現する形式ではないことを主張したい。そのように解釈することを可能にする根拠は、この形式に使われる動詞が著しく限られているという語彙的制約があることである。具体的には、「得・あり・なる」などの類の他、「見る・聞く・行く」などの類にはほぼ限定されているのである。後者の類の動詞はおおまかにいうと何らかの意味で対象を自らの内のものとする、いわば広義の「獲得」とでもいうべき意味を持つ動詞だという共通性を持つ。例えば、「君を見てしか」というのは「見る」という方法・やり方で対象を自らのものとすることを表わすが、本質的に重要なのは「君」という非現実の対象を思い浮かべそれを「呼ぶ」ことで希求を表わすことができる点で、述体的に言語形式として述語によって積極的に希求を語るのではないことである。その点では「君もが」と大きな違いはなく、ただ獲得のしかたに「視覚的である」という指定がついているだけである。このように「シカ」も希求を述体的に語るのではなく、あくまで「非現実の対象の存在」の指定を表わすだけで、ただ、その指定したものを獲得するに当たってのやり方が指定されているに過ぎない。

### 2－1 「モノ」の希求

#### ①得

- ・ 龍の馬も今も得てしかあをによし奈良の都に行きて来む為（万葉集806）
- ・ 天飛ぶや雁を使に得てしかも奈良の都に言告げ遣らむ（万葉集3676）
- ・ 耳なしの山のくちなし得てしがなおもひのいろのしたぞめにせん（古今1026）
- ・ いかでこのかくや姫を得てしがな（竹取）

「モガ」の諸用法の中でプロトタイプと言えるのが、存在のあり方に特別な色合いがない場合の「薬もが」という形式であったとするなら、「シカ」の諸用法の中で「獲得」のしかたに特別な色合いが最も希薄なのが「得」で、獲得のしかたに特別の指定がついていない場合と言えるだろう。この場合、結果的に「かぐや姫を得てしがな」と「かぐや姫もがな」の表現性は極めて近いと言えるだろう。

## ②尋ねる

- ・散り残る花もやあるとうち群れてみ山がくれを尋ねてしがな（新古今167）
- ・あはれ かかるさわぎにいかになりにつむ たづねてしがな（大和126段）

未入手のものを探し求めるのが「尋ねる」であるから、「得」のヴァリエーションといってよからう。「み山がくれを尋ねてしがな」というのは、「み山がくれもが」と近い表現性を持つと言えるだろう。

## ③出現動詞

- ・久方の月の桂もをるばかり家の風をも吹かせてしがな（拾遺473）
- ・甲斐がねをね越し山越し吹く風を人にもがもやことづてにせむ（古今1098）

「風」はあらかじめ存在が承認されているものではなく、「吹く」という動詞の結果、出現するものである。いわば、吹いてこそ「風」であって、吹く前には風は存在しないのである。このような出現動詞は広義の存在動詞と言うべきもので、「風もが」と表現性において大差ないと考える。

## 2-2 ある状態での存在の希求

### ④「あり・なる」の類

- ・なかなか人にあらずは酒壺になりにてしかも 酒に染みなむ（万葉集343）
- ・久方の天飛ぶ雲にありてしか君を相見むおつる日なしに（万葉集2676）
- ・伊勢の海に遊ぶあまともなりにしが浪かき分けてみるめかづかむ（後撰892）

これらは、必ず「二」を伴って使われる。「モガ」の1-2の④の例、「鳥にもがも」に相当する例である。即ち、「AがBであること」の希求、「AがBという状態で存在する」ことの希求と考えられる。「酒壺になりにてしかも」は「私が酒壺である」ことの希求で、「私の酒壺という状態での存在」の希求と解釈する。

⑤広義の存在動詞

- ・ま玉手の玉手さし交へあまた夜も寝ねてしかも（万葉集1520）
- ・思ふどち春の山辺にうちむれてそこともいはぬ旅寝してしか（古今126）
- ・さてもさぶらひてしがなと思へど（伊勢83段）

これらは、一面で動作主の動作を表わす動詞であるが、一面で「ある状態で存在する」ことを表わす動詞で、広義の存在動詞と考えられる。即ち、「寝てしかも」は「『寝ぬ』という状態での存在」の希求、「さぶらひてしがな」は「『さぶらふ』という状態での存在」の希求と考えるわけである。これは、「モガ」の1－2の⑤（並べてもがも）と類似のタイプと考えられるだろう。

2－1および2－2は、動詞の語彙の意味として、大きくいって存在そのものの希求を表わすものであり、「モノ」の希求といってよい。これに対し、次の2－3はこれらとは異質である。

2－3 「獲得」のしかたの指定つき

⑥「見る・聞く・知る」の類

- ・まそ鏡見しかと思ふ妹も逢はぬかも玉の緒の絶えたる恋の繁きこのころ（万葉集2366）
- ・あな恋し 今も見てしか山がつかきほに咲ける大和撫子（古今615）
- ・甲斐がねをさやにも見しかけけれなく横ほりふせるさやの中山（古今1097）
- ・近江ぢをしるべ無くても見てしがな 関のこなたは侘しかりけり（後撰786）
- ・いとかくてやみぬるよりは稲妻の光のまにも君を見てしか（後撰884）
- ・いかでこのかぐや姫を得てしがな 見てしがなと音に聞きめでてまどふ（竹取）
- ・いかで心なさけあらむ男にあひ得てしがなと思へど（伊勢63段）
- ・追風に八重のしほぢを行く舟のほのかにだにもあひみてしがな（新古今1072）
- ・紀の国や由良の湊に拾ふて玉さかにだにあひみてしがな（新古今1075）
- ・秋ならで妻呼ぶ鹿を聞きしがな 折からの声のみにはしむかと（金葉集240）
- ・思ひつつまだ言ひそめぬわが恋を同じところに知らせてしがな（後撰1013）

これらは「獲得」のしかたに様々なヴァリエーションをつける形である。「見る・聞く」は獲得方法に、視覚的・聴覚的な指定が加えられたものと考えられる。即ち、「得」をベースに獲得方法の指定を受けたものである。これは1－2、2－2が存在のあり方に対するヴァリエーションの指定を受けたものとは全く別種である。しかし、獲得方法の指定つきであれ、根底に「得」と

いう意味を持つものであれば、本質的にはモノの希求と考えてよい。例えば「まそ鏡見しか」は「まそ鏡もが」という意味をその根底に持っているという点では、希望喚体の根本である「モノの希求」からは全くはずれていないのである。

#### ⑦「行く」の類

- ・ほととぎす無かる国にも行きてしかその鳴く声を聞けば苦しも（万葉集1467）
- ・とうかの国に至りしがな（赤染衛門集177）
- ・心うし 深き山にも入りにしがな（曾丹集572）

空間的に移動することによって、ある場所を獲得すると解釈する。即ち、「獲得」の一つの方法としての「空間的移動」と考えることにする。これも⑥と同じく広義の「モノ」の希求と考え、希望喚体として解釈することに不都合は無い。次は「モガナ」の例であるが、「行く」を補って考えられるから、このタイプのヴァリエーションと考える。

- ・まことにて名に聞く所羽ならば飛ぶがごとくに都へもがな（土佐1月11日条）
- ・男も女も「いかで疾く京へもがな」と思ふ心あれば（同上）

### § 3 結 語

以上、述べてきたことをまとめると次のようになる。

#### A. 「モノ」の希求そのもの

1－1；2－1

#### B. 「存在」のあり方に様々なヴァリエーションを付ける形

1－2；2－2

#### C. 「獲得」のしかたに様々なヴァリエーションを付ける形

2－3

このような分類・整理をもとに本稿での立場を明確にしておこう。本稿では、希望喚体の基本はあくまで「モノ」の希求にあると考える。ものの名前を呼ぶだけで述語を持たない形式においては、何らかの言語形式が直接に希求という意味を表わしているのではない。述語なしという名詞一語文に相当するような形式が、れっきとした意味を持った言語表現として存在しうる時、結果として「希求」という意味を帯びるのである。このように、述語によって述体として語る形式

と、喚体では、言語形式が意味を担う、その担い方が異質である。

そこで、「モノ」の希求を表わすのが希望喚体の基本だとする本稿の立場から、山田(1908)と川端(1965)の論を検討してみよう。

山田(1908)に関しては、まず、シカのついた喚体について検討する。山田はシカについて、キの連体形のシによって準体言になり全体として体言相当のものにカがついた形と考えている。もしこの解釈の通りなら、あらゆる動詞についてこの形が許されるはずであるが、実際はそうではない。§ 2 で検討したように、シカに接続する動詞にはかなり強い語彙的制約があり、上で整理したようなA B C以外の動詞はありえない。つまり、連体形という活用形によって体言相当の資格を持つことが喚体と解釈できる根拠ではなく、あくまで「モノ」の希求に還元できるような意味を持った動詞に接続しているからこそ、喚体表現と認めることができるのである。

第二に、山田が述語が省略されていると考えた例について検討する。山田(1908)は次の例について、カッコ内の述語が省略されていると考えている。

- ・天飛ぶ鳥にも（なりてし）がも
- ・世の中は常にも（ありにし）がな
- ・人の心を枕とも（してし）がな
- ・かの君達を（得てし）がな
- ・飛ぶが如くに都へも（行きにし）がな

本稿の立場では、述語が省略されているといってもどんな述語でも許されるわけではなく、あくまで「モノ」の希求に還元できるものに限る。第1例と第2例は1－2に分類されるもので「あり」を補うことができる。第4例は2－1、第5例は2－3に分類できるもので「モノ」の希求と解釈できるものである。第3例「人の心を枕ともがな」については、1－3に分類されるもので「モノ」の希求を踏み越えたものとして、喚体とは見なさないことにする。

次に、川端(1965)の希望喚体の了解と本稿の立場との関係を明らかにしておこう。川端は、希望喚体はすべて基本的に「コト」の希求であるという立場にたち、「花もが」という一見「モノ」の希求に見えるものも「あり」を述語とする「コト」の現実化の希求であると考え。本稿の立場はこれとは全く逆で、「花もが」はあくまで「モノ」の希求であり、さらに一見「コト」の希求に見える場合、特に「並べてもがも」や「見てしか」など動詞にモガ・シカがついた場合でさえ「モノ」の希求として解釈できると考える立場である。このように解釈する根拠は、一見「コト」の希求に見える場合も、そこには強い語彙的制約があり、本質的には「モノ」の希求に還元できるものだけが許されるという事実に求められる。本質的に「モノ」の希求に還元できないような動詞、例えば「折る」についていえば、「花を折る」ことを希求する場合に、「花を折りてもがも」とか「花を折りてしか」という形式は決してありえないのである。

希望喚体は「モノ」の希求を基本としつつも、その言語形式としての不安定さゆえ、「コト」の希求へと開いていく傾向を確かにもつ。しかし、「コト」の希求一般に開いていくことは決してなく、あくまで「モノ」の希求に還元できるような範囲でのみ「コト」の希求へと開いていく余地を持っているのだと結論づけられる。

#### 注

- (1) 「たぐひて明日さへもがも」は「明日さへたぐひてもがも」の倒置と考える。  
 (2) テシカは奈良時代からあるが、ニシカは平安時代以降現われる形である。  
 (3) 「尋ねる」は「行く」のヴァリエーションとして、2-3の⑦で扱うことも考えられる。

★ 出典は、小学館古典文学全集による

#### 参 考 文 献

- 尾上圭介(1977)「語列の意味と文の意味」『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院  
 ———(1986)「感嘆文と希求・命令文—喚体・述体概念の有効性」  
     『松村明教授古希記念 国語研究論集』明治書院  
 川端善明(1958)「形容詞文」『国語国文』27-12、京都大学  
 ———(1963)「喚体と述体」『女子大文学』15、大阪女子大学  
 ———(1965)「喚体と述体の交渉—希望表現における述語の層について」『国語学』63  
 小池清治(1967)「連体形終止法の表現効果—今昔物語・源氏物語を中心に」『言語と文芸』54  
 近藤要司(1990)「喚体と述体」『日本語学』9巻10号  
 徐 一平(1994)「『～ぬか(も)』の表現について」  
     『北京日本学研究中心学術専書(一) 日本語研究後編』第一章第二節  
 堀川智也(1996)「現代語における喚体的表現について」  
     『日本語・日本文化論集』5、名古屋大学  
 益岡隆志(1984)「『てある』構文の文法—その概念領域をめぐる」『言語研究』86  
 森重 敏(1965)「山田文法批判」『国文学解釈と鑑賞』30-12  
 水谷静夫(1988)「喚態文の文法」『計量国語学』16-7  
 ———(1989)「喚態文積義法」『計量国語学』16-8  
 山田孝雄(1908)『日本文法論』宝文館  
 ———(1936)『日本文法学概論』宝文館

★本稿は1996年11月17日に「文法懇話会」で発表した内容に加筆・修正を加えたものである。席上、貴重なご意見を多数いただいた。ただし、内容に関し一切の責任は筆者にあることは言うまでもない。

(1997. 9. 19 受理)